九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

日本語語源研究の歴史とその現状について

張, 愚
九州大学大学院人文科学府 : 博士後期課程

https://doi.org/10.15017/1518340

出版情報：文獻探究. 53, pp.77-82, 2015-03-31. 文献探究の会
バージョン：
権利関係：

《短信》

日本語語源研究の歴史とその現状について

張　愚

一、序論

言語の系統と起源（いわゆる語源）を確定しようとする知的欲求は、これまで多くの言語学者を駆り立て、多方面からの論議を交わさせてきた。語源の研究といえば、語の発生および変化を究明する学問であると、これまでの先行研究（吉田（二〇〇六）参照）に言われているが、その発生と変化をどう捉えるかについては様々な立場がある。小稿では、それらの立場を概観したうえで、従来の国語学研究の中に胚胎した「個別的な語史研究を包摂した、語彙史体系の中での語源研究」（阪倉（一九七八）、前田（一九八六）など。詳しくは後述）の方法論に立ち返り、その研究手法の重要性を再確認する。

二、比較再建型手法を用いた日本語語源研究の限界

人類学・考古学的な研究手法を除くと、言語学的な立場から語源を分析するにあたって、主に二つのアプローチがあるように思われる。一つは、二つ以上の言語を比較して、それらの言語間の歴史的関係を明らかにし、共通の祖語を再構成する比較再建型の手法であり、もう一つは、問題となる言語の内部での語源研究を重視する研究手法である。

前者に関しては、古い文献から推定される言語の音韻・語形・統辞構造などの通時的な推移を、類型地理論的に判定されるところのヨコの地理的な広がりに照らして、祖語再建を試みたインド・ヨーロッパ比較言語学の方法が挙げられる。この比較再建型の手法は、東洋学者であったウィリアム・ジョーンズ卿（W.Jones、一七四六～一七九四）がヨーロッパ諸言語とサンスクリット語を比較する際に発見した事象を元にして、ボップ（F.Bopp）、ラスク（R.Rask）、グリム（J.Grimm）等によって確立されたものである。一八八七年以降では、日本語の系

統関係（いわゆる「南方・北方起源説」「混合語起源説」）を究明する際にも用いられるようになった。しかしながら、現在のところでは、音韻・文法構造・基礎語彙といった三つの面において、日本語（上代語も含む）との間に明確な対応関係が見られるのは、日本語の一方言か、それとも姉妹言語と見るべきかについて定説を得るに至っていない琉球諸語しかない（注1）。

以上に述べた系統論的な方法を利用して日本語の語源を証明する際に、印欧語ほどの成果が見られないのは、主に二つの理由があると考えられる。その一つは、服部（一九五九）、風間（一九七八）が指摘するように、印欧語と日本語の言語構造が違うためである。印欧語は、語根部と接辞によって語幹が作られ、「それに続く語尾とが一つに融合していながら、一方では母音交替によって相互に関係を保ち機能し合っている」（風間（一九七八・一八頁）参照）。それに対し、日本語は屈折に富んだ印欧諸語のように、複雑な形態で綴りを取らず、文法機能を、主に時代ごとに入れ替えやすい接辞あるいは、それに準ずる要素によって果たすことが多い。そのため、印欧諸語のように、共通基語を再建する際に見られる各語派の文法上の不規則形を合理的に説明することが困難であると考えられる（注2）。

また、言語構造の違いだけでなく、資料の面でも、印欧語は日本語より比較的有利であるといえる。高津（一九九二・九一頁）、橋本（二〇〇〇・三六頁）も指摘するように、印欧語の場合、他の語族に比べて非常に資料的に恵まれている。最も古い文献は、ヒッタイト語の楔形文字の文献やヴェーダの賛歌の如く、紀元前一〇〇〇年～一五〇〇年にまで遡り、しかも祖語から分かれ出た時代はそれほど古くはなく（服部（一九五四・二九頁）によると、今から四五〇〇年～六〇〇〇年前後）、多くの語派が現代にまで生きている。とはいえ、仮にそれらの文献を利用せずに、現代フランス語とスペイン語とイタリア語などの基礎語彙だけを採取して祖語を再構築してみても、「その結果は、ラテン語はいうにおよばず、俗ラテン語ともほど遠いもの」（橋本 二〇〇〇・三六頁）とされるところからすると、甚だ古い時代に遡りうる文献の存在が印欧語の系統を有効に解明できた大きな要因の一つと言えよう（注3）。

文献の量と性質の面から考えれば、日本語は、印欧諸語のように、比較再建法を用いた語源研究はできない。二～四世紀前後の土器などに記された一つないし二つの文字は、文章すらなしていない点から言えば、祖語比較再建の文献として利用することは難しい。また、三世紀成立の『魏志』倭人伝に記録されている五十五語の音訳語彙（《然り》の意を表す「噫」という一語も含む）の研究については、大矢透、濱田敦、亀井孝、安本美典、清瀬義三郎則府等の優れた論考があるものの、上古音と中古音の過渡期にあたる三世紀の中国語音を精密に復元することは決して容易ではなく、古代中国語の発音をそのまま音韻体系の異なる日本語に当てはめて良いかといった問題点も抱えているため、少なくとも現段階では、系統論研究の資料として用いるのは無理があるように思われる。結局現在のところでは、日本語の古形を体系的に窺い知ることのできる最古の文献は、近年大量に出土した七世紀末～八世紀初成立の木簡資料（音義木簡、交用書き木簡、書簡木簡、和歌木簡・宣命木簡）と、これまでの先行研究に指摘されてきた八世紀成立の記紀万葉以外にない。このような状況では、日本語と他言語の親族関係を証明する作業は印欧語の場合と比べものにならないほど、大きな困難を伴うであろう。文法構造の対応関係はともかく、音韻法

則を確立すべき同系語彙（注4）の特定という最初の一歩から難航を極める。服部（一九五四）、松本（二〇〇七・七頁）の指摘する「言語年代学の想定による基礎語彙の消失率」（注5）と合わせて考えれば分かることだが、たとえば日本語とアルタイ諸言語の間に、著しい文法構造上の類似点があるのにも拘らず、時代ごとに変化・消失されやすい基礎語彙が現存の文献上では確定できないために、両者の親族関係は未だに証明されていない状態である（注6）。

三、日本語内部での語源研究について

以上のような問題点があるため、日本語の語源は、比較再建型手法によっては解明されず、他言語との系統関係も不明のままに残されてきた。そこで、日本語の語源研究には、これまでの比較再建型手法とは違った方法論がなければならないと、一部の語源研究者から指摘されるようになり、印欧語の比較方法とは全く異なったアプローチが試みられるようになった。それは、前節の冒頭部分で述べた、調査対象となる言語の内部での語源研究を重視するものである。

管見の限り、ここでいう「言語の内部での語源研究」は、日本語語源研究の歴史と現状を鑑て、さらに二つのタイプに分けることができる。一つは、日本語内部での共時的な分析を手掛かりにして、その記録以前の古形を推定し、その発達過程を再構築するという意味での内的再建手法（内的再構ともいう／松本（一九九四）、川本（一九九七）など参照）である。そしてもう一つは、阪倉（一九七八）、前田（一九八六）の言う「個別的な語史研究を包摂した、語彙史体系の中での語源研究の手法」である。両者とも、同系言語の比較を前提としないため、小稿では便宜上、比較再建法と区別して、「ある言語内部での語源研究」と称している。ただし、両者は成立背景と研究状況が全く異なるため、多くの相違があるのも事実である。

まず、前者の成立背景と研究状況について簡単に述べたい。これは、ソシュール（Ferdinand de Saussure）を代表とした一部の歴史言語学者が、比較再建型の手法の限界を見極めたところで、新たに提唱した方法論である。歴史言語学の再構方法として利用される場合、当該方法が、同系であるという証明がまだされていない言語の研究にも用いられ得るところは、前述した比較再建型の方法論と根本的に異なっている。内的再建手法について、言語の先史を部分的に明らかにしたにすぎず、比較言語学のように祖語を体系的に再構築することはできないといった建設的な批判（吉田（一九九六・一〇二頁）参照）もなされてはいる。しかしながら、派生・屈折といった形態的な変化が顕著であり、かつ系統関係もまだ完全に証明されていない言語の先史を解明する上で、意義のあることは確かであろう。

後者は、伝統的な国語学研究の中に胚胎し、中世から近代にかけて培われてきた語源解釈論をベースにしてなったものである。無論、その初期の研究方法については、あまりに個別的・恣意的で、文化史的である（阪倉（二〇一一・二一六頁）参照）といった問題点を抱えており、また原義の分からなくなっている言葉を、こじつけで解釈しようとする民間語源説・通俗語源説（folk etymology）の《氾濫》（見方にもよるが、あるいは《隆盛》と言うべきか）も、しばしば指摘されるところである（例：「馬道→面倒」）（注7）。しかし、近代以降になると、語構成法・造語法・方言や外国語との音義対照といった様々な視点から、従来の説が見直されるようになり、研究も次第に恣意的な解

釈から、科学的な説明という方向に近づき出してきたと言えよう（とはいえ、『日本国語大辞典』（第一・二版）や、現行の一部の日本語語源辞典における語源の記述は、まだ十分科学的であるとは言い難い）。

異なる研究背景のもとで成立した前者と後者の相違は、主に研究スタンスと語源の定義という二つの面に顕著に現われている。まず、研究スタンスの面において、前者の内的再建法は、言語事象の史前の発達過程構築を目的とし、方言を含めた言語内の共時的な比較分析にその主眼を置いており、後者のように、各時代の文献資料を利用して、個別的な語の由来と、その史的変遷（形式と意味の関係）について調査することはあまりないように思われる。また、語源の定義についても、前者の方は、語の源流といえば、記録・文献以前の言語の形とし、その古形を推定することに力点が置かれているようだが、後者の場合は、語源とは「文献的に遡りうる限り」という限定つきのものであって、前者のように、語の祖形の推定などを意図するものではない。

四、語彙史体系における語源研究の重要性

では、このような複数存在する研究法の中で、果たしてどのような方法を取れば最善であろうか。無論、研究手法はいくつあっても構わないし、それらの方法は対等であるという考え方もありうる。ただ、比較言語学者・メイエ（A.Meillet）が著書『史的言語學に於ける比較の方法』（泉井久之助訳・一九三四年・一一～一二頁）で指摘するように、研究対象となる言語が異なれば、方法論自体の有効性も変わってくるということも事実である。前述した語源研究の諸方法は、それぞれ異なった研究背景のもとで成立したものであり、またそれぞれの言語の特徴を考慮したうえでつくられたものでもある。そのため、ある言語、あるいはある語族の研究で成果を遂げた学説や方法でも、それをそのまま他の言語の研究に採用して良いのかという省察も時には必要である。異なった言語の研究には、その言語の性質と置かれた環境に即応した方法を用いるのが一番効果的であろう。

以上により、日本語の語源問題に取り組む上で、前節に述べた後者の研究手法をより重視すべきではないかと、筆者は考える。無論このことは、再建型手法の従来の研究成果を無視して良いということを意味しない。前者の内的再建法は、現代ドイツ語のような、「派生・屈折といった形態的なプロセスが顕著に用いられている言語にはとりわけ有効である」（吉田（一九九六・七八頁）参照）が、日本語のように不規則で複雑な形態を取らず、文法機能を主に接辞によって果たす言語の場合、動詞・助動詞を含めた祖形再建は決して容易な作業ではないため、方法としては後者に重きを置くべきではないかと考える（注8）。

また、自然言語の語彙は常に個別的に変化していくため、文献以前の姿や祖形などを性急に論じる前に、まず調査可能な範囲内で、その言語のもつ大半の語彙の歴史的解明を試みなければならない。このような観点から考えれば、日本語の語源研究にとって、祖語の再建や他言語との系統関係の解明は確かに重要ではあるが、それよりももっと早急に解決すべきなのは、問題となる語彙の出自および、周辺言語との通時的な影響関係（たとえば、日本語史における漢語・朝鮮語の受容など）であろう。これらの研究は、文献学的実証を経ることによって、はじめて可能となる。殊に「根本語原」（注9）がまだ解明されていない日本語の場合、後者の「個別的な語史研究を包摂した、語源研究」は大きな意義をもっているように思われる（無論、言語学研究として

の体系性・法則性も重要ではあるが）。

注

注1　無論、琉球語と言っても、地域によってはかなり分化しているように思われる。基礎語彙の面では、地方を問わず日本語との対応が見られるが、アクセントや文法事項に関しては、なお慎重に検討しなければならない点がある。たとえば、古代日本語の係り結びの用法が、まだ多くの琉球方言に残っている一方、動詞の活用については、琉球語でさえ日本語の古形に遡ることはできない。

注2　これは、決して日本語だけに見られる現象ではない。単音節で、孤立型言語に属する中国語においても同じことが言える。それについては、王（一九八二・四六頁）を参照。

注3　高津（一九九二）は、セム・ハム語族の例を取り上げ、甚だ古い時代に遡りうる文献資料をもたない語族の研究に関しては、印欧語族の比較方法をそのまま用いることが難しいと述べており、言語の系統研究における古文献の重要性を強調している。ただし、例外も全くないわけではない。一九三八年以降、デンプヴォルフ（Otto De-mpwolff）を代表とする言語学者たちが、文字・文献のないオーストロネシア語族の代表的な言語を、印欧語族の比較方法論で比較して、その祖語（Proto Austronesian）の再構成に取り組み、一定の成果を上げている。しかし、「ブラック・スワン」のような例外現象があるとしても、風間（一九七八）、高津（一九九二）、橋本（二〇〇〇）等の指摘するように、古い文献の乏しい語族や、あるいは語族を形成するであろうと推測されている言語群の研究においては、やはり印欧語族の比較方法がそのままに用いられにくいのも事実であろう。

注4　当然、語彙同士の意味も一致しなければならない。

注5　松本（二〇〇七・七頁）は、「どんな言語でもほぼ一定の速度で消失している」と述べており、アメリカの言語学者 Morrs Swadesh の提唱した「語彙統計学」(lexical statistics) 的方法論の影響を受けているように思われるが、それに対し、言語の消失あるいは変化が決して一定の速度で起きることはないとして、Swadesh の語彙統計学的方法を疑問視する論も見られる。詳しくは橋本（二〇〇〇・三九頁）等を参照。

注6　ただし、一言基礎語彙と言っても、どのような語彙が基礎的と言えるか、言語によって判定しにくいことが多い。その判定がいかに困難であるかについて、橋本（二〇〇〇・三八～四二頁）は数詞・親族語彙・身体語彙などの例を挙げて詳しく説明している。たとえば、朝鮮語と日本語の数詞について、他の語彙とは異なり、新たに形成されたり、借用したりすることが少ないと考えている学者（河野六郎など）もいるが、橋本氏の論を視野に入れて考えれば、それは印欧語の系統研究の影響によるところが大きいと思う。印欧語の場合には、数詞ほど安定したものはなく、系統論といえば、まず数詞の調査から始めるという習慣があるが、それに対し、日本語・朝鮮語を含めた東アジアの言語の場合は、他言語の数詞を借用するケースが多く（日本語に限っていえば、「十一」以上の数字になると、和語の数え方がなくなり、中国語からの借用語〔漢字音〕の体系に移る）、また親族語彙・身体語彙に関しても、印欧語より不安定のように思われる。そのため、Swadesh list に入っている二一五語の基礎語彙が、日本語の系統研究にとってどれほど有効なのかについては、もう一度慎重に検討する必要もあろう。

注7　吉田（二〇〇六）の述べるように、「言語学的語源に、民間語源は付きまとうものである」（十一頁）。初期に行われた印欧語の歴史的研究についても、同じような現象が見られる。詳しくは、W.B. Lockwood (1969) *Indo-European Philology*（永野芳郎 訳・二二七頁）を参照。

注8　吉田（一九七六・第二章）にもあるように、日本語動詞の祖形再構に関しては、語根や接辞のみを問題にした従来のやり方では限界があるように思われる。

注9　ここでの「根本語原」は大槻文彦氏の用語である。詳しくは『大言海』の「本書編纂に當りて」を参照。

参考文献

王力（一九八二）「漢語滋生詞的語法分析」（『同源字典』第二章、商務印書館）

風間喜代三（一九七八）「言語の系統と形成」（『岩波講座日本語 12　日本語の系統と歴史』第一章、岩波書店）

亀井孝（一九六三）「日本語の系統」（『日本語の歴史 1』第三章、平凡社）

川本崇雄（一九九七）「日本語の動詞活用形の起源についての現在の私の結論」（『語源探求』五、明治書院）

阪倉篤義（一九七八）「日本語の語源」（『岩波講座日本語 12　日本語の系統と歴史』第八章、岩波書店）

阪倉篤義（二〇一一）『増補　日本語の語源』（平凡社）

杉田洋（一九八一）「オーストロネシア諸語」（北村甫［編］『講座言語　第六巻　世界の言語』第八章、大修館書店）

高津春繁（一九九二）『比較言語学入門』（岩波書店）

橋本萬太郎（二〇〇〇）『言語類型地理論・文法』［橋本萬太郎著作集　第一巻］（内山書店）

服部四郎（一九五四）「「言語年代學」即ち「語彙統計學」の方法について —日本祖語の年代—」（『言語研究』二六、二七）

服部四郎（一九五九）『日本語の系統』（岩波書店）

濱田敦（一九五二）「魏志倭人傳などに所見の國語語彙に關する二三の問題」（『人文研究』三—八）

堀井令以知（二〇〇六）「語源学の分野と課題」（吉田金彦［編］『日本語の語源を学ぶ人のために』第三章、世界思想社）

前田富祺（一九八六）「語彙史と語源研究」（『語源探求』一、明治書院）

前田富祺（二〇〇五）「語源研究における漢語」（『日本語学の蓄積と展望』明治書院）

前田富祺（二〇一二）「日本人は語源をどのように考えてきたか」（『日本語学』三一—七）

松本克己（一九九四）「日本語における動詞活用の起源」（『語源探求』四、明治書院）

松本克己（二〇〇七）『世界言語のなかの日本語　日本語系統論の新たな地平』（三省堂）

吉田和彦（一九九六）『言葉を復元する　比較言語学の世界』（三省堂）

吉田金彦（一九七六）『日本語語源学の方法』（大修館書店）

吉田金彦（二〇〇六）「語源とは何か」（吉田金彦［編］『日本語の語源を学ぶ人のために』第一章、世界思想社）

山田俊雄（一九七八）『日本語と辞書』（中央公論社）

Antoire, Meillet (1925) *La méthode comparative en linguistique historique. Oslo et Paris*［泉井久之助　訳（一九三四）『史的言語學に於ける比較の方法』（政經書院）］

W.B. Lockwood (1969) *Indo-European Philology*［永野芳郎　訳（一九七六）『比較言語学入門』（大修書店）］

国立歴史民族博物館［編］『古代日本　文字のある風景—金印から正倉院文書まで—』（朝日新聞社）

（ちょう　ぐ・本学大学院博士後期課程）